

高江遺跡第 3 次発掘調査

【調査要項】

件 名 令和7年度 高江遺跡第 3 次発掘調査支援業務

所 在 地 仙台市宮城野区岩切

調査期間 令和7年6月2日～令和8年3月6日

調査面積 約 6,000 m²

調査原因 仙台市岩切山崎今市東土地地区画整理事業

調査担当 仙台市教育委員会

調査支援 株式会社三協技術

【遺跡の概要】

高江遺跡は JR 東北本線岩切駅から南西約 1.2 km に位置します。令和元年の試掘調査で初めて発見された遺跡であり、これまでの第1次・2次調査では古代～近世の溝跡や水田跡、掘立柱建物跡、弥生時代中期(約 2,400 年前)の水田跡が確認され、それらとともに多くの弥生土器をはじめとした遺物が出土しました。

【調査の概要】

現在、全体のうち北側半分の約3,000m²(1区)を調査終了し、南側半分の2区を調査中であり、中～近世の遺構、弥生時代の遺構を調査しています。

中～近世の遺構については、溝跡や井戸跡、土坑、柱列があります。溝跡はいずれも方角を意識して配置されており、特に真北に延びる溝跡(SD3)は確認できる範囲で長さ50m以上、幅約2～3mと大規模です。この溝跡から分岐して複数の東西方向の溝跡が確認されていることから、これらは屋敷もしくは城館の内部を区画する溝跡の可能性がります。溝跡は3時期の掘り直しがあるとみられますが、詳細な時期差は調査中です。

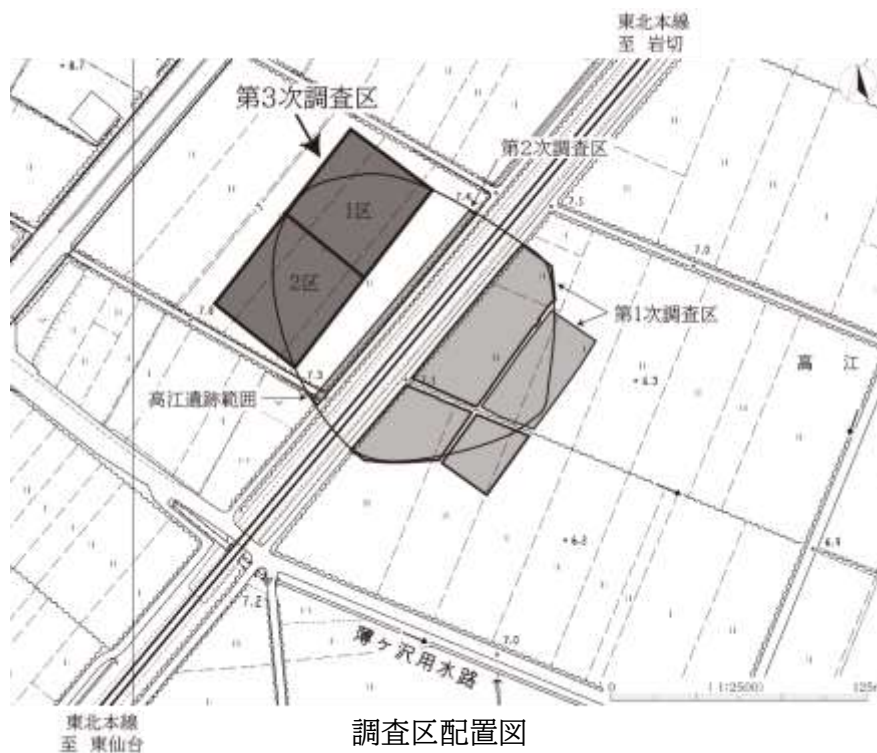
調査区東側には虎口のように屈曲する部分を持った溝跡(SD1)があります。この上層からは17世紀中頃の磁器片が出土し、埋没の最終段階はこの年代と考えられます。しかし、下層から16世紀末～17世紀前半のものと同推測される、当時としては高級品である織部や志野の皿とともに漆器、櫛、下駄などの生活に関わる遺物も出土していることから、屋敷跡の

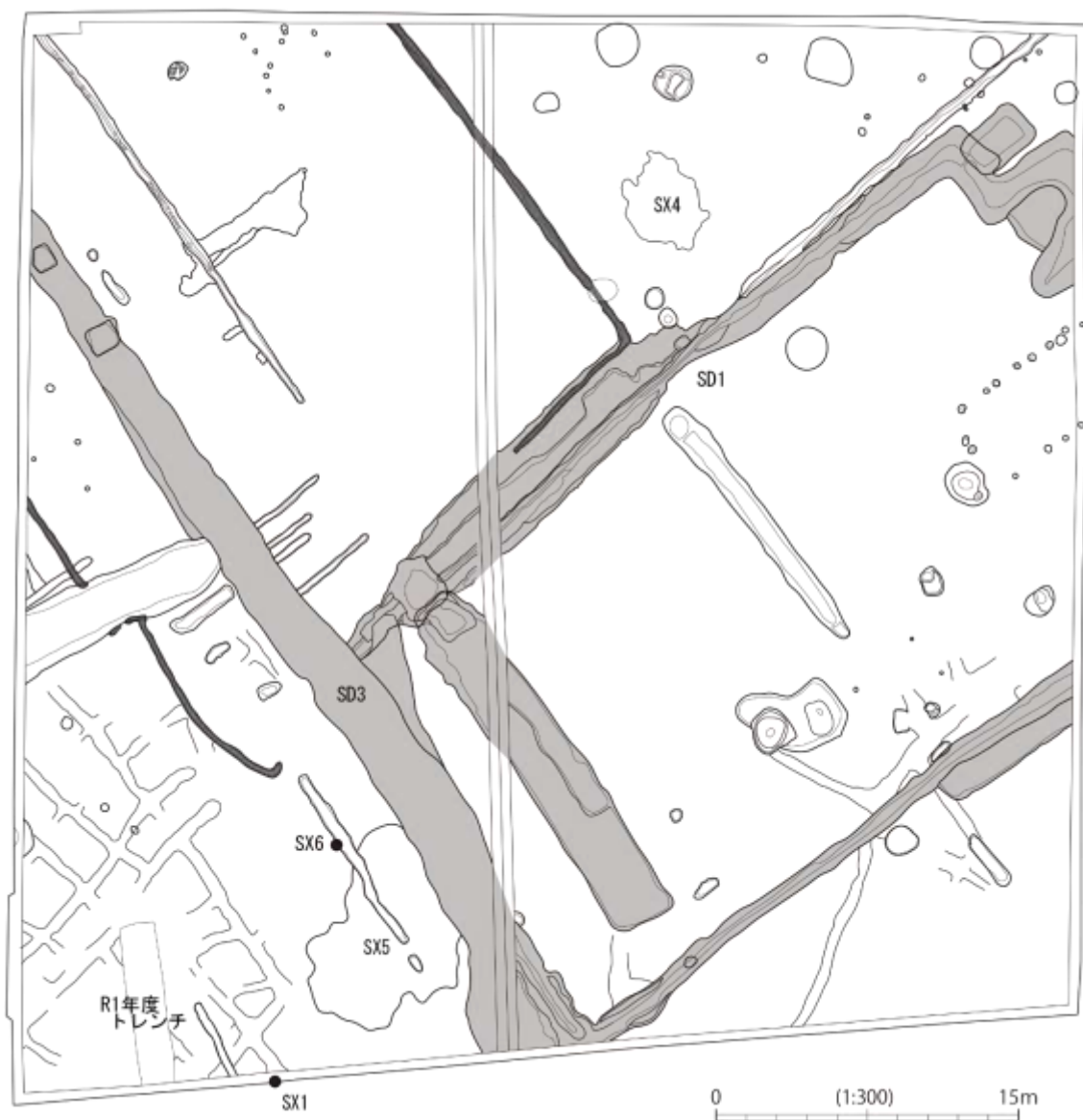
機能した年代はこの範疇^{はんちゆう}におさまると推定されます。そのほか、井戸跡からは漆器^{おんじやく}、温石(昔の携帯カイロ)、土坑からは火縄銃の弾が出土するなど、遺物は非常にバラエティに富んでいます。出土遺物全体から考えると、屋敷には比較的身分の高い人物が居住していたものと推定されます。

弥生時代の水田跡は、現代の水田の耕作や中～近世の遺構により大きく削平され、残念ながらほとんど残っていませんでした。しかし、調査区西～南西側で小畔^{こあぜ}の痕跡が確認できたほか、大量の弥生土器や石器を含んだ遺構(SX5)や水田耕作土を掘りこんだ土器の埋設(SX1・6)が確認されました。埋設された土器は全て壺で、1点はほぼ完全な形で埋められていました。何のために水田の中に埋められたのかについては検討が必要です。

高江遺跡周辺には洞ノ口遺跡や鴻ノ巣遺跡をはじめとした、中世の屋敷跡が見つかったり遺跡のほか、岩切城や小鶴城といった中世城館が存在しているため、それらとの関係性を考えていく必要があります。また、この地点は塩釜方面からの物産を運搬する陸路である「奥大道」と、湊浜から旧七北田川流路を介し水産物などを運搬した水運路との交差点に当たります。その周囲には今市遺跡があり、中世に市場が開かれたことが分かっています。

今後は、残りの調査区で屋敷内部を区画する溝跡がどこまで続き、周りを囲う外堀がないかの確認が必要です。また、弥生時代の水田域の範囲、水田を営んでいた人々の集落の有無を調査していくことも目標となります。





1区平面図



作業風景



SX5弥生土器出土状況(西から)



SX1 出土 弥生土器壺(北東から)



SX6 出土 弥生土器壺(東から)



SD1 溝跡屈曲部(北西から)



SD3 溝跡(南から)



SD1 溝跡出土 陶器(北から)



SD1 溝跡出土 漆器椀(南西から)